

# ソルフェージュスクール新聞

春夏号

発行 2016年10月25日  
責任者 田中純子  
編集 豊島区目白4-23-10  
Tel 03-3953-8517

(公財)ソルフェージュスクール

## ご挨拶

理事長  
吉村隆子



この度、私 吉村隆子は公益財団法人ソルフェージュスクールの理事長の重責を担うことになりました。身を引き締め、心を込めて出来るだけの力を注ぎ、今年創立五十五周年を迎えたソルフェージュスクールの継続とさらなる発展のために励んで行きたいと思えます。どうぞよろしくお願いたします。

五十五年前、ソルフェージュ（あるいはソルフェージュ）とカリトミックという言葉はほんの一部の人にしか知られていない言葉でした。電話で「ソルフェージュスクールです」と言っても大抵はわかつてもらえず、電話口で何度も名前を繰り返さなければならぬほどでした。今ではこの二つの言葉は広く知れ渡り、意味がわからなくとも何か音楽に関係ある言葉だと認識されています。そのことを考えただけでも感慨深いものがあります。

創立者が何故ソルフェージュスクール（初めはソルフェージュ教室）を始めたかについては既に色々なところで語られています。音楽を学ぶことは技術を磨き、ヴィルトゥオーソのように弾けるようになることというのが当時の大方の目標だったようです。人間の心は置き去りにされても技巧的に優れた演奏が出来れば良い、という考え方に疑問を持つ音楽家仲間が集まり色々と議論を重ねた結果、技術の習得だけではなく音楽の持つ深い意味を理解し、人にも自分にも豊かな音楽体験をもたらすためには音楽の基本（読譜）を丁寧に十分に学ぶことが大切だとの結論に至り、学びの場所を作りました。

それ以来、創立時の先生方は長年、ついこの間まで情熱的に音楽の本質、教えるにあたって大切な事などを常に語り合っておられました。寂しいことに皆さん天国に逝ってしまったました。

私はソルフェージュスクールはとても素晴らしい学校だと誇らしく思っています。創立時の先生方の理想と情熱を受け継ぎ、何はともあれ音楽の素晴らしさ、楽しさ、一生の友とし

## 楽しく、しかし丁寧に音楽の基礎を学ぶ

ての音楽がソルフェージュスクールで学ぶ方々に伝わることを使命だと考えます。それには教える側と教わる側の間に愛情の込められた信頼関係が築かれ、お互いの人間的成長がそこから育つ環境が必要です。ソルフェージュスクールでは講師にも事務にも全員にそのことを認識してもらっています。みんなで生徒さん(大人も子供も)の成長と進歩を見守っています。こんなユニークな学校は珍しいと思います。

音楽は人間性に直結した表現芸術ですので、本来の意味での音楽の修業には一人一人の人間の成長が伴わなければ人に感動を与える音楽を生み出すことは出来ません。人の気持ちを理解出来る心、愛のある行動、はアンサンブルにおいても不可欠です。出来るだけその機会を設けているのもソルフェージュスクールの大きな特徴です。音楽の基本と人間的成長の両方をずっとずっと大切にしているのがソルフェージュスクールです。時とともに変化しなければならぬことがあります。しかし、絶対に守らなくてはならないこともあります。今までと変わりになく創立時の精神と音楽の基礎の勉強は守って行かなければならないと思っています。

ソルフェージュという言葉がもう世の中に周知されている今、ソルフェージュスクールのもう一つの使命は、楽しく、しかし丁寧に音楽の基礎を学ぶ(我々が長年かけて積み上げてきた)方法をより広く世の中に提示して行くことです。そのために二〇一二年に公益財団法人の認定を受けました。

これからも私たちがみんなでソルフェージュスクールを愛し守って行きたいと思えます。



.....  
公益財団法人ソルフェージュスクールは授業料と皆様の寄付で成り立っている法人です。どうか折に触れて私たちの活動へのご理解とご援助をこれからもどうぞよろしくお願いたします。



### ソルフェージュスクール 創立 55 周年記念演奏会

2017年1月29日(日) 14時開演  
東京文化会館 小ホール

モーツァルト/ヴァイオリンソナタ K.454  
ドヴォルザーク/「スラブ舞曲」より  
R. ロジャース/サウンド・オブ・ミュージック



## 春のミュージックキャンプに参加して

原田牧江

娘はバイオリンを習っておりませんが、ソルフェージュスクールで始めなかったので、技術的な側面に偏りがちで毎日のお稽古が殺伐としてきて、このキャンプの参加を決めました。最初は娘だけのつもりでしたが、「親子で参加いかがですか？」の一言で、なんと私も参加してしまいました。この八年、娘

のバイオリンのお稽古に付き合う以外は、バイオリンを弾くこともなかったのですが、小学生や中学生と弾くならなんとかなるかしらと思ったわけです。しかし、蓋を開けてみると大人の参加者ばかり。しかも、バッハの短調ミサ曲のオブリガートとヘンデルのトリオソナタ！で休みなく練習が続き…とはいえ、リコーダーの音色や合唱と合わせることも楽しく、リコーダーとのトリオはバイオリン二本で弾くより味が出て断然面白いと思えました。二日では足りなくて、青木先生や大村先生のレッスンを思い出し、もっと音色やボーイングを工夫したかったな、という思いです。親子とも収穫の大きいキャンプでした。

## うわし〜く〜く〜く〜の

## ミュージックキャンプ

小学三年生 原田裕理

家であまり練習する時間がなかったので、ミュージックキャンプの一日目は良くできなかったけれど、隆子先生や大村先生や妹尾先生が「サラバンドってどんな曲だと思う？」「そのころのおどりってどんなかな？」「二回目はそとひくのはどうかな」と、教えてくれたり、はるかちゃんの演奏をきいたりしていたら、どういう風にひくのかかわかってきました。家でもおどりの動画を見たり、はるかちゃんの音を消さないためのひき方を練習したりして、二日目は良く出来るようになってきました。

子ども三人でやるトリオはとっても面白かったし、隆子先生と一しよのトリオも、隆子先生の音がひびいて面白かったです。本番に、はるかちゃんと「きんちようする。」と言っていたけど、隆子先生が何回も「だいじょうぶだよ。きんちようしないと書いていけばきんちようしないから。」と言ってくれていたから、練習ではまちがえていたところも、全部まちがえないでひけました。またやりたいです。

## 春のミュージックキャンプ 発表会プログラム

ショップ/サラバンド

ヴィヴァルディ/サラバンド

ロジャース/「サウンド・オブ・ミュージック」より

モーツァルト/ピアノ四重奏曲 変木長調 第1楽章

レイエ/トリオソナタ ト長調 第1、第4楽章

ヘンデル/トリオソナタ ハ短調 第1、第2楽章

ブームス/ハイドンの主題による変奏曲

バッハ/キリストよ、憐れみたまえ



## 音楽という魔法の力

吉村隆子

四月二日と三日の二日間にわたって春のミュージックキャンプが行なわれました。新小学三年生から大人まで、参加者は

十四人でした。(ピアノ三人、ヴァイオリン・ヴィオラ七人、リコーダー一人、声楽三人)

普段なかなか他の楽器と合わせる機会がないので、この二日間は、皆で、音楽を作る喜びを味わえる楽しい時間でした。

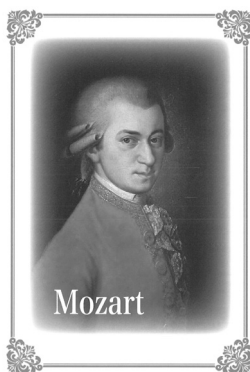
年令の違いを感じず、普段顔を合わせる事の無い(曜日がちがうので)お友達と知合いになり、音楽には、一緒にアンサンブルを楽しむ事によって誰とでもすぐ親しくなれるという、魔法の力があるように思えます。

朝から夕方まで、音楽の中に身を置くこと、これも又、不思議な力が加わって参加者全員の進歩の著しさには、いつも驚きを覚えます。



# 春のコンサート

2016年4月29日(金・祝)



出演

Hr 水野信行  
Cl 古澤裕治  
Vn 糸井みちよ・妹尾美紀子  
Va 川崎公子・林徹也  
Vc 土屋りえ・吉村隆子  
Pf 込山今日子・林さち子  
Sop 江原陽子  
ソルフェージュスクール室内合奏団

クラリネット五重奏曲 KV 581 イ長調

ホルン五重奏曲 KV 407 変ホ長調

2台のピアノによる  
ピアノ協奏曲 第19番 KV 459 ヘ長調  
第1楽章 アレグロ

オペラ「フィガロの結婚」より

とうとう嬉しい時がきた  
恋とはどんなものかしら  
自分で自分がわからない

ゲスト 水野信行

ホルン奏者・東京音楽大学教授

「モーツァルトのしらべ」

この稿が皆様のお目にふれるのは秋。きつと今更春のコンサートのことなど……と思われ  
る方も多いと思うのですが。(まだ五月だというのに、新聞社?から催促を受けたのでご  
ざいます!)

水野紀子

今回が何故モーツァルトだけだったのか?という質問を受けますが、これはまず古澤先  
生の曲が決まっております、更に組み合わせを考えていくと、オールモーツァルトというのも  
良いかな?と思ったわけです。プログラムの冒頭にも書きましたが、モーツァルトなら、  
神様が喜んでくださる。なおお客様もきっと喜んでくださるだろう、と。  
如何でしたでしょうか?これが、ヒンデミット四曲だと、プロを作る側もちよつと考えて  
しまいますが。  
コンサート自体は、全ての方がスタッフとなり、初めてで慣れない私をフォローして下さい  
ました。特に加藤先生には特別な気配りをいただき、この誌面をお借りしてお礼申し上  
げたいと思います。

ゲスト奏者の水野信行氏からは謝礼をご寄付  
いただきました。心より感謝申し上げます。

## 楽しくアンサンブル

七月十八日(月・祝)

大石豊

七月十八日に開催された「楽しくアンサンブル」に、私のような年寄りの初心者でも参加させて下さり、大変感謝しています。ピアノの場合、独奏曲を一人で練習することが多く、特に初心者のうちは減多に合奏出来る機会がありませんので、このような機会を作って頂けることは、ピアノを学ぶ者にとつととても有意義なことだと思えます。

今回のレッスンは、水野紀子先生がモーツァルトのピアノ四重奏曲ト短調K478の第一楽章を教材として行つて下さったのですが、僕の練習不足もあり、一緒に演奏して下さいました皆様が大変御迷惑をお掛けしたことをこの場を借りてお詫び申し上げます。

実際に合奏してみますと、自分のことで精一杯となり、

他の楽器の音を聞く余裕がなく、本来は他の楽器の邪魔をしないようP(ピアノ)で演奏すべき所をf(フォルテ)で演奏してしまつたり、休符なのに音を伸ばし続けてしまつたり、アンサンブルの上で注意すべき大切なポイントを色々先生から指摘して頂き、本当に感謝しています。

又午後のレッスンにはピオラで林徹也先生と一緒に演奏して下さい、先生の素晴らしい音を間近で聞ける喜びに浸ることが出来ました。

次回又このような機会を与えて頂けるならば、皆様に迷惑を掛けないよう十分に練習を積んだ上で参加させて頂きたいと思つていますので、宜しく御願ひ申し上げます。

本  
当に貴重な経験  
をさせて頂  
き、ありが  
とうございま  
した。



## 流石にソルフェージ・スクール!

山崎斐雄

古沢先生が自由学園時代の同級生ということや、長女山崎孝子が長く講師を務めさせて頂いている等からソルフェージ・スクールは私の意識の中で普通以上の存在になっています。ですから、毎年恒例のソルフェージ・スクール演奏会には余程のことがない限り出掛けさせて頂いています。

頂いています。

小さい子どもから大人まで広い年齢層に亘る方々が一堂に会して演奏される様は他に例を見ないものです。全体のプログラムの中で、成人による弦楽、あるいは管弦楽合奏は何時も聴き応えのあるものですが、とりわけ興味深いのはその広い年齢層の人たちによる「器楽合奏」と「合唱」です。

今年の「器楽合奏」は、素人の私に敢えて感想を述べさせて頂けるなら、「流石にソルフェージ・スクール!」という演奏だったと思います。選曲も良く、拍と音程の見事さに感心しました。同じく自由学園時代の同級生で、自身でも演奏歴が長く音楽に含蓄のある、私の右隣にいた石川和夫君が「信

じられないほど素晴らしい!」と感嘆の声を発していました。

プログラムの最後を飾った老若男女全員による「合唱」は圧巻でした。「ソルフェージ・スクールここに在り!」を感じさせるに相応しい出来栄であったと思います。願わくはもっと多くの方々にご来場頂けるように周りに声を掛けたいと思いました。

来年の演奏会が今から楽しみです。

## ソルフェージスクール演奏会

6月26日(日) 於 日本橋公会堂

- ・バスティン/ロンド・ファンタスティーク ほか
- ・アレンスキー/カッコー ほか
- ・リュリ/シャコンヌ ほか
- ・モーツァルト/弦楽四重奏曲 Gdur KV387 第1楽章
- ・リトミックとうた
- ・イエッセル/おもちゃの兵隊の行進
- ・レスピーギ/古代舞曲とアリア 第3組曲より
- ・サウンド・オブ・ミュージックより

♪プチコンサート♪  
小学生3人組の  
素敵な演奏が  
聴けます!



リュリ/シャコンヌ

## 舞台裏から♪

ステマネ担当 加藤恵理

6月26日、日本橋公会堂にて後援会主催によるソルフェージスクール演奏会が行われました。可愛い2組の連弾に始まり、子供と大人の室内楽、リトミックとうた、休憩をはさんで器楽合奏、弦楽合奏そして「サウンドオブミュージック」と、子供から大人までが一堂に会して様々なアンサンブルを楽しむことができました。そんな中、実は舞台裏でも素晴らしいアンサンブルが楽しめたのです。

当日は朝からリハーサルです。プログラムに合わせて楽器の準備や椅子や譜面台の数や並べ方の確認等、本番で出演者がより良い演奏ができるよう、きめ細かいチェックをします。今年も中学生以上の生徒たちが裏方を手伝ってくれました。数年前のリトミックでは、舞台の上を得意気に歩いていた子供たちが、次に何が必要であるかを自分で考え、てきぱきと動いていく姿はとても頼もしいものでした。またリハーサル中に気分の悪くなったお子さんを舞台袖まで運んだ時にはすでに横になるための椅子が用意され、お医者様まで待機してくださり事なきを得ました。

これもソルフェージスクールならではのアンサンブルではないでしょうか。

今回出演した小さい子供たちが、いつの日か仲間と共に、豊かなアンサンブルを奏でてくれることを心より願っています。



## 小鳥の家

リトミック担当 込山今日子

今回は、ステージに大きな小鳥の家がセットされました。普段のレッスンで、子どもたちは小鳥のおうちに音符を書いています。音楽会ではA組が音符を貼っておうちを完成させました。そして、色とりどりのスカーフを手に音楽の森へお散歩に行き、音楽に合わせて動きました。

B組は、ピアノの音の動きや重なりをよく聴いて、ドレミで歌いました。続いてリズムや動作を覚えて真似をしました。最後に、聴いたリズムを楽譜で表すとどうなるのかを考え、音符を並べました。

A組B組ともに、普段のレッスンの様子が目に浮かぶような発表となりました。

# 亀井由紀子特別公開レッスン

八月十六日（火）



原田牧江

子育て中で娘のバイオリンやピアノの  
お稽古に付き合う以外、自分が楽器  
を弾くことはぶつりと辞めていた私で  
すが、四月に春のミュージックキャンプ  
に娘と参加したことをきっかけに、自  
分でも少しずつバイオリンを弾きはじ  
めました。ミュージックキャンプではリ  
コーダーとヘンドルのトリオを弾かせて  
いただいたのですが、その時の話を青  
木先生の室内楽クラスで一緒に弾いた  
バイオリンの臼井さんと色々としてい  
るうちに、亀井先生のレッスンを受け  
るのはどうかという話になり、娘のピ  
アノの先生である込山先生をお誘いし  
て申し込んでしまいました。

三人で練習をしていくうちに、主に  
三つの疑問が出てきました。①現代の  
楽器でどのように演奏したら良いのか。  
ヘンドルらしきとはどんなものなのか。  
②通奏低音（ピアノ）の弾き方と弦  
とのバランス。③二分音符など伸ばし  
た音の弾き方（切り方）。などです。  
レッスンでは、亀井先生が私たちの疑  
問を初めからわかっていただかのように、

全てが次々とクリアになっていきまし  
た。最初の音はオープンでクリアな音  
で始めること、バロックの弾き方特有に  
ビブラートは少な目に、頭の音は出る  
べきところははっきり弾く。そうする  
と立体的になり、お互いの主張も聴こ  
えてきて掛け合いとなり、聴き手も面  
白い。伸ばす音は音符の長さ通り最  
後までずっと弾く必要はなく、弾いて  
も聴こえない。その弾き方で三者が掛  
け合っているとどこどころトリオとし  
ての和音が立つところがわかる。常に  
音形や拍をよく感じること。例えば  
同じ音が続くゆつくりしたテンポの楽  
章も、ヒントになるエクスペリメン  
ションがある場所を探すと自然としつくりす  
るテンポや表現の仕方がわかってくる。  
楽章の終わりは目で合図して合わせ過  
ぎず、呼吸でする。リラクセスした通  
る音を出すためには、声楽の呼吸や  
体の使い方を研究してみると良い。ま  
た、通奏低音は、楽器の音や雰囲気  
を真似ることが必要なのではなく、古  
楽器で演奏していたころのそのパートと  
してのありよう、通奏低音のありよう

## ～作曲家の想いを自分の心で感じとる～

を表現することが大切。などとい  
うことです。すぐにはできないこと  
ろが多かったのですが、すべての疑  
問は氷解した思いでした。

亀井先生のレッスンから私自身が  
一番深く心に感じたことは、バッハ  
はどう弾く、ヘンドルはどう弾く、  
ということをあこれ頭で分析し  
たり考えたりするより前に、まず、  
それぞれの音楽（楽譜）から作曲  
家の想いを自分の心で感じとり、  
自然に身体が反応出来るようにす  
る、ということでした。そして、亀  
井先生が「こんなふうには」と弾い  
て下さる一音一音には、亀井先生  
の内面にある深い音楽への情熱と信  
念が真っ直ぐ音となって表れている  
ことを感じていました。先生の信念  
とは、「音楽だから人によって好き  
嫌いはある、でも、私はこうやろ  
うと思う。」ということであると思  
うのですが、かといって私たちに押  
し付けるということではなく、常に  
柔軟性がありながらも音楽の神髄  
の見方と姿勢を示唆して下さってい  
るように思うのでした。

八歳の娘もレッスンを受けさせて  
いただきました。いつもはバイオリ  
ン、というだけで少し反抗的になる  
娘ですが、レッスン当日スクールに  
着くや三階のホールから亀井先生

が延々とスケールをさらわれている音  
が聞こえてきて、「あれは亀井先生？」  
とずっと黙って聴いており何かに感  
じるところがあるようでした。レッス  
ンでは先生のご指導を一生懸命聞き、  
心から納得して弾いている様子を見  
て、親の私が本当に驚きました。

実は、申し込んでしまってから親子  
共々非公開にしていた方が良  
かったのでは、とぎりぎりまで迷う気  
持ちはありましたが、レッスン終了後、  
聴講されていた隆子先生からはお互い  
にもっと主張して良いことなどを、江  
原先生からは通る深い音を出す姿勢  
や呼吸など声楽と通じるところなど  
を教えていただくことができ、ため  
なるおまげが沢山ついてきました。江  
原先生からも、「公開レッスンならでは  
の利点は沢山ある。」と言われ、時  
には自分たちを客観的に見る大切さも  
わかりました。密度の濃い本当に貴重  
な時間となったことを心より感謝致し  
ます。亀井先生ありがとうございました。



創立 50 周年記念演奏会の時の  
亀井由紀子先生

ソルフェージュというのは、フランス語で「西洋音楽の学習において、楽譜を読むことを中心とした基礎訓練」のことです。(ちなみにリズムを中心として身体で表現することをリトミックと呼びます。)では、なぜ器楽のレッスンだけでなくソルフェージュを学ぶことが大切なのでしょう。

日本の音楽文化は古来より「口承(口から口へ伝えられること)」により発展してきました。ですから今でも西洋音楽の教育の上で耳で聴いて弾く方が多いのも事実です。しかし、それだけでは先生のマネをするだけの演奏になってしまい、演奏者の音楽的な心を育むことにはなりません。大切なことは、楽譜から読み取ったことを自分の心を通して実際の音に、音楽に結びつけるということです。楽譜は作曲家が残してくれた大切な贈り物です。一音ずつゆっくりでも自分で読むことができたなら・・・こんなに楽しいことはありません!

私たちが外国語の本を読むとき、その言語をマスターしていなければ、辞書を片手に読みますよね。しかし楽譜は、音やリズムなど基礎的なことを一度覚えたら世界中の作曲家の楽譜を読むことが出来ます。世界共通の言語と言われるのも納得です。このソルフェージュという基礎の上に、演奏のテクニックや自分の感情が積み重なって、それぞれの素敵な音楽が生まれます。そこには、正しいも正しくないも存在しません。はじめは時間もかかりますし、面倒くさいと思うかもしれませんが、楽譜を自分の力で読み仲間と演奏する喜びを幼い時期から味わって欲しいのです。また演奏をしなくとも、音楽を聴く上でソルフェージュの基礎があるかないかで喜びも違って来でしょう。ソルフェージュは難しい学問ではなく、作曲家の心を知り、私たちの感じる心を育ててくれる大切な基礎なのです。

### 〔2015年度 皆勤賞・精勤賞〕

次の15名の皆さんに、皆勤賞・精勤賞が贈られました。(敬称略)

おめでとうございます!

#### 〈皆勤賞〉

森夏実・久島夏紫・堤真悠・堀山実穂  
岩岡望・佐藤巴南・和栗太佑・石川湧

#### 〈精勤賞〉

森千春・石川真渚・金井遥香・田中智晴  
鈴木那雲・白井友香・堀山耕太郎



理想の音は自分の中にあるとは思いますが、私の場合、弾くことに追われていると音色作りが雑になってしまいます。青木十良先生の下で学んでいる時は勝手に引き上げられました

『ああ、来て良かった』と心から思いました。今年も亀井先生とベートーベンの後期のカルテットをさせて頂きました。レッスン中、ちよつとした短いフレーズを「こうかしら?」と何気なく弾いて下さるのですが、その音楽の説得力たるや!亀井先生の音を耳にするだけで、もう深いところまで連れて行ってもらい、『そうだった、音楽ってこういうものだった』と気づかされるのです。

### 夏季合宿

八月十八(木)〜二十一日(日)



会場  
ペンション  
スケッチブック

佐藤千鶴子

ソルフェージュスクールの夏季合宿は、参加したい気持ちと仕事や雑事やら曲の準備が間に合わない焦りから、参加決意にいつも迷いがあります。しかし今年も行つて音を出した瞬間、『ああ、来て良かった』と心から思いました。

が、先生の亡き後は、自分の音楽はつまらないんじゃないか?これで大丈夫だろうか?と迷うことも多くなりました。しかし今回、亀井先生の音に触れた時、青木先生の音に触れていた幸せな時を思い出しました。多分こちらにその気があれば、素晴らしい人に触れる事は自分一人では行くことの出来ない別世界をみられるチャンスなんだと思います。

本当に良い夏になりました。迷いや模索と付き合いながら、仲良くやつて行こうと思います。ありがとうございます。



★ 編集後記 ★

レイアウトを工夫してみました。楽しく読んでいただけました。 (T・W・I)